



Data	
監督・脚本・製作:	アスガー・ファ ルハディ
出演:	レイラ・ハタミ/ペイマン・ モアディ/シャハブ・ホセイ ニ/サレー・バヤト/サリ ナ・ファルハディ/ババク・ カリミ/メリッラ・ザレイ/ アリ=アスガー・シャーバズ イ/シリン・ヤズダンバクシ ユ/キミア・ホセイニ

👁️👁️ みどころ

ベルリンでの金熊賞、銀熊賞からアカデミー賞まで！アスガー・ファルハディ監督の人間洞察力が際立つ本作はすばらしい。弁護士の私は当然イランの法制度に注目だが、どっさり勉強すれば、本作はもっともっと面白く！

2つの「争点」の整理が大切だが、それを巡って男優陣、女優陣はいかなる攻防を？また、11歳の女の子の視点と敬虔なイスラム教徒のコーランへのこだわりとは？さらに、あっと驚く結末とは？すべての「論争」が新鮮かつスリリングだから、こりゃ法科大学院生は必見！

* * * * *

ベルリンでの受賞のみならず、アカデミー賞までも！

アスガー・ファルハディ監督の『彼女が消えた浜辺』(09年)(『シネマルーム25』83頁参照)は、「エリはどこへ消えたの？」をテーマとしたイラン発の「極上の密室型推理劇」として、『キサラギ』(07年)(『シネマルーム13』61頁参照)と同じように怒濤の推理を楽しむエンタテインメントで、同作は2009年の第59回ベルリン国際映画祭で見事銀熊賞(監督賞)を受賞した。それに続いてアスガー・ファルハディ監督が長編第5作目として発表した本作は、2011年の第61回ベルリン国際映画祭で最高賞である金熊賞を受賞しただけでなく、銀熊賞(男優賞・女優賞)も受賞、つまり、「史上初の主要3部門独占受賞！」という快挙を成し遂げた。さらに、去る2月26日に発表された第84回アカデミー賞の外国語映画賞において、私が注目していたポーランド映画『ソハの地下水道』(11年)や、『Bullhead』(11年)(ベルギー)『footnote』(11年)(イスラエル)『ぼくたちのムッシュ・ラザール』(11年)(カナダ)を退けて、見事外国語映画賞を受賞した。

昨今核開発計画をめぐる欧米諸国との対立を深めているイランは、経済制裁への連携を強める各国に対してホルムズ海峡の封鎖という強硬手段を示唆しているが、もしそうなれば・・・？そんな危機を予想して既に市場では原油価格がじりじりと上昇している中、イラン映画である本作がアカデミー賞外国語映画賞に選ばれたことは大いなる驚きであると共に、映画の善し悪しは政治を離れた世界共通のテーマであることを立証した。さあ、そんな本作が描くテーマとは？また、本作に登場する男女たちの人間としての営みとは？

どっさり勉強すれば、もっともっと面白く！

映画冒頭、「離婚してでも外国に移住したい。1年半も奔走してやっと国外移住の許可を取ったのだから」と主張する妻シミン（レイラ・ハタミ）と「アルツハイマーを患い、介護を要する父（アリ＝アスガー・シャーバズィ）を残して国外移住することはできない」と主張する夫ナデル（ペイマン・モアディ）の論争が映し出される。もっとも「論争」と言っても、中国映画『我愛你（ウォ・アイ・ニー）』（03年）で観たような夫婦間の激しい言い争い（『シネマルーム17』345頁参照）ではなく、誰かに自分の主張を訴えているもの。アスガー・ファルハディ監督は、あえてその相手の姿を見せないまま2人が訴える姿ばかりを映しているが、2人がともども訴えかけている相手は裁判官と思われる。本作には後に判事（ババク・カリミ）が登場し、この判事がナデルに対する殺人事件の告訴と、逆にナデルからの父が虐待されたとして介護のために雇った女性ラジエー（サレー・バヤト）に対する告訴の事件を処理する姿が描かれるが、そのシーンを見ていると、冒頭のシーンの相手は裁判官だと確信することができる。

プレスシートにある貫井万里（早稲田大学イスラーム研究機構研究助手）の「イラン映画の中の北と南 価値観と生活空間の境界を越えて」によると、また映画観賞後イランの裁判制度を調べるため片っ端からネットで集めた情報によると、何とイランでは裁判官が検察、判事、調停人の3役をこなすらしい。日本では考えられない制度だが、本作の面白さやストーリー展開の中に見えてくるその時々無理不尽さを理解するためには、イランの裁判制度や婚姻、離婚、子供の親権等々に関する法律制度の理解が不可欠だ。また、それをどっさり勉強すれば、本作はもっともっと面白く！



第84回アカデミー賞外国語映画賞受賞！『別離』
4月7日（土）より、Bunkamuraル・シネマほか
全国ロードショー
(C)2009 Asghar Farhadi

老人介護にイスラム教は不向き？

西欧先進諸国では職業における男女差別がほとんどなくなってきたから、かつては女性だけの職業だった看護婦も看護士に様変わりした。もっとも、助産婦は助産師と名称が改められたものの、日本では助産師国家試験の受験資格は女性のみとされているから、性別

によって国家資格の取得が制限される稀なケースだ(米・英などでは男性の助産師もOK)。他方、イスラム教では女性が男性に肌を見せることは厳禁だから、今なおスカーフ着用が義務づけられている。さらに、男女隔離が大原則で、フタや排泄物、死体などの不浄物に直接接触することが禁じられているイスラムの世界では、女性の介護士にナデルの父の世話をしてもらうことは基本的に無理なようだ。だって、おじいちゃんを裸にして風呂に入れたり、その排泄物を処理したりすることはイスラムの教えに反し、アラーの神の怒りを買うことになるからだ。もっとも、最近ではシミンのようにそんな堅苦しい習慣を捨てて外国に亡命するのがはやり(?)だし、イランと同じように厳格なイスラム国家であるサウジアラビアでは、保守的な慣習に抵抗して車の運転をした女性に対して裁判所がむち打ちの刑を言い渡した事件が世界の問題を呼んだ。もっとも、無免許運転の罪でむち打ち10回の罪を言い渡された彼女に対しては国際的な人権団体から非難の声が上がり、アブドラ国王が事態の収拾に乗り出して、むち打ちの刑を取り消す決定を出した。したがって、イスラムの教えを厳格に守ろうとしなければ多少のことはOKだが、さてラジエーの場合は？

本作に描かれる告訴劇(?)の根元は、すべてラジエーが敬虔なイスラム教信者であったことにある。もっとも、それならラジエーは介護の仕事を引き受けなければよかったのだが、パザールの靴屋で働いていた夫ホッジャト(シャハブ・ホセイニ)が失業したため、夫に隠れて働かなければならぬラジエーにとっては仕事を選び好みする余裕はなかったわけだ。テヘラン北部のアパートに住むナデルは銀行員、シミンは英会話教師で各自の車を持っているし、部屋の広さや家具類を見てもその住まいはかなりの高級アパート。それに対して、ホッジャトとラジエー夫婦はテヘラン南部の貧しい地域に住んでおり、ラジエーは1時間以上バスに乗ってナデルの家に通わなければならないらしいから、その格差にもビックリ。日本でもアメリカでも中国でも格差の広がり近時大問題となっているが、さてイランで格差が広がった理由はナニ?それはネット情報を集めればすぐわかるから、本作を契機としてあなた自身でお勉強を……。

えっ、これが殺人罪? 目撃証人は? 現場検証は?

日本では丸3年を迎えた裁判員裁判の問題点が表面化しているが、本作ではナデルがラジエーをドアから追い出したところ、階段下に転落したラジエーが妊娠中であったため、結局流産してしまうという事件を、判事がどう裁くかが焦点となる。ナデルがラジエーを怒りつけたのは、ラジエーが父親をしばりつけたまま外出したことによって、ナデルがアパートの中に入った時ベッドから落ちた父親が死にかけていたため。しかも、ラジエーは別の部屋からお金を盗んだらしいから、ナデルの怒りはさらに沸騰。これに対してラジエーは、イスラムの教えにかけてお金は盗んでないと弁明し、給料を払ってくれと迫ったが、ナデルはとにかく出ていってくれの一点張り。その挙げ句にこのような事件に発展したのだが、ナデルとシミン夫婦が病院に見舞いに行くと、そこにいたラジエーの夫ホッジャトは掴みかからんばかりの勢いで食ってかかり、暴力沙汰にまで発展することに……。

双方の言い分を冷静に聞いていた判事は、受精後120日以降の胎児は人間と見なされ

るから本件は殺人罪の審理になると説明。これには、ナデルもビックリなら、私もビックリ。そのうえ、すぐに保釈保証金を納めなければただちに拘置されることになるなんて聞いて、さらにビックリだ。この殺人罪の審理は、第1にナデルはラジエーの妊娠を知っていたのか？第2にナデルはラジエーを突き飛ばして階段下に転落させたか否か？を争点として、11歳になる1人娘のテルメー（サリナ・ファルハディ）が通う女子高の先生の証言や、現場検証のシーンが登場するから、法科大学院の学生は必見！他方、ラジエーから殺人罪での告訴という仕打ちを受けたナデルは、コトの原因はラジエーが父親を放置したことにあると主張してラジエーを逆告訴したから、ラジエーの方も大変だ。法曹大国の日本（？）では、2組の夫婦がここまでの事件で対立すれば当然双方に弁護士が就くだろうが、さてイランの弁護士制度は？

シミンはどっちの味方？私はそれにイライラ！

「殺人事件」は離婚問題にケリがつかないままシミンが実家に帰っていた間に起きたから、ナデルはシミンを頼らなかつたが、シミンが「協力できることはしなければ・・・」と考えたのは当然。そこでシミンは保釈保証金の準備をしたり、病院に一緒に見舞いに行ったりしたのだが、ホッジヤットの暴力によってシミンまでケガをさせられることになったのは想定外。殺人事件の告訴ともなれば、夫婦間の離婚問題はさておいて、妻は夫に協力すべきは当然。私はそう思うのだが、西洋かぶれ（？）し、権利意識の強い（？）シミンはどうもそうではないらしい。つまり、コトの真相は別として娘のためにも早く「事件」を解決し、外国行きのお話を煮詰めたらしいが、それって妻の風上にも置けないのでは？

そんな論争が再三くり返された挙げ句、シミンの提案は示談金を払って円満に解決しようというものだが、それは弁護士の私の価値観からはもっての外。なぜなら、まさにナデルが反論するように、そんなことをしたら自分の責任を認めたことになってしまうからだ。本作では、第1の論点たるナデルがラジエーの妊娠を知っていたか否かについて、複雑かつ微妙な事実関係が展開されるので、それに要注意。他方、第2の論点については、ナデルがラジエーを突き飛ばした事実がないことは私たち観客の目にも明らかだが、なぜラジエーは突き飛ばされたと主張するの？それをめぐっては、推理小説まがいのさまざまな「伏線」が施されているから細心の注意が必要だし、ラスト近くになってラジエーから意外な「告白」がなされるので、それに注目！

ナデルの仕事は銀行員だが、シミンが実家に戻った後はテルメーの学校への送り迎えの他、裁判への対応で仕事どころではない状態。ところが、シミンはナデルの猛反対にもかかわらず1人で勝手にホッジヤットのところに赴き示談交渉に及んだから、「おいおい、それはないだろう。お前はどっちの味方？」「亭主の意向に反して勝手なことをするなよ！」と思ってしまう。もし私が弁護士としてナデルの委任を受けていれば、いくら妻でもシミンがそんな勝手な行動を取っていることがわかれば、怒鳴りつけるところだが・・・。

「コーランへの誓い」の重みは？

本作はアスガー・ファルハディ監督による卓越した人間ドラマだが、同時に推理小説あ

るいは裁判モノとしてのエンタメ性も備えている。『ステキな金縛り』（11年）では幽霊の証人適格が問題になった（『シネマルーム27』191頁参照）が、裁判モノでは証人尋問が華。とりわけジョン・グリシャム原作映画では、そこでの丁々発止のやりとりが見モノとなる。日本でも「異議あり！」をキーワードとした『逆転裁判』（11年）は、マンガチックとはいえ証人尋問風景は結構興味深かった。

もっとも、弁護士生活38年になる私の経験では、証人尋問における証人の宣誓は全く当てにならないと割り切っているし、アメリカでも聖書を手にした宣誓がどこまで意味（重み）を持つのかよくわからない。そんな私の目には、敬虔なイスラム教信者であるラジエーが、ナデルから「コーランに手を置いて突き飛ばされたために流産に至ったことはまちがいないと誓ってくれ」と言われた時の対応が興味深い。結局シミンの言うとおり示談することにしたナデルの方針に私は全然納得できないが、それはナデルが決めたことだから弁護士の私が不服でも仕方ない。そんなナデルが関係者全員そろった席で、示談金を払うのはOKだが、これだけは誓ってほしいとナデルから迫られると、さてラジエーは・・・？そこから生まれてくる思いがけない結末に私はビックリ！きっとあなたも驚愕するはずだ。

子供の視点は？子供はどっちを・・・？

中学1年生、11歳の思春期の女の子ともなれば、両親の離婚問題に敏感に反応するのは当然。シミンが実家に戻った後テルメーはナデルのアパートに残ったが、その様子を見ていると決してナデルはアパートに残ることを強要しておらず、あくまでテルメーの自主的判断に委ねていることがよくわかる。また、「事件」発生後のナデルとシミン間のテルメーに関するやりとりを見ていると、私の目にはナデルの方が冷静かつ客観的でシミンの方が感情的になっているように思えてならない。アスガー・ファルハディ監督の人間分析眼の卓抜さがよくわかるのは、ナデル、シミン間の離婚問題とナデル、シミン夫婦VSホッジャト、ラジエー夫婦間の告訴合戦に否応なく巻き込まれていく中で、テルメー特有の視点、テルメー特有の質問・意見を散りばめていることだ。テルメーの質問の最大のポイントは、「お父さんはホントにラジエーが妊娠していることを知らなかったの？」というものだ。それに対してナデルは「なぜそんなことを聞くの？」と訝りながらも、「知らなかった」と答えていたが、ストーリーが次々と展開されていく中その回答はずっと維持されるの？そこらあたりが興味深いから、それに注目！

どうやら父親の殺人事件は、テルメーも同席していたあの「コーランへの誓い」騒動の中で結論が出たらしい。すると、後はナデルとシミン間の離婚問題とテルメーの親権問題だが、ナデルもシミンもテルメーの意見に従うことになったらしい。そして、今日は判事の前でテルメーがその結論を述べる日。「結論は出ましたか？」の質問に対してテルメーが「はい」と答えたため、判事は続いて「その結論は？」と回答を促したが、さてその回答は？本作がベルリン国際映画祭主要3部門を独占し、かつアカデミー賞外国語映画賞を受賞した最大の要因は、このラストにあったのでは？そう思えるほど見事なこの結末のつけ方は、あなた自身の目でしっかりと・・・。

2012（平成24）年3月1日記